

## 九 長生不死の神方

春の風の及ぶ處には、花が咲き鳥が歌ふやうに、如來の御名の聞ゆる處には、竟に心の春が生じて、誰の身も和ぎ、心もやはらぐ。而して潑刺たる血の通ふのを覺ゆる。胸に若々しい血が通ひ、生命の泉が湧いて來れば、云何しても歡ばずに居られなくなる。小兒は一番によく歌ふ。年を重ねても、人は皆花咲く野を通るとき、月の澄みわたる宵など、何となく歌ひたくなり、歌も自ら出て來る。かくて常に歌ふことの出來る人は幸福であります。此人には、孤獨の寂しきも哀れさも、貧しい生活の悲しさも、病の床の苦しきも、このために和げらるゝ。殊にそれが、歎の歌でなく、悲の歌でなく、道を歌ひ恵を歌ふことの出來る者は、一層幸福である。親鸞聖人は常に歌はせられたお方でありました。苦の坂にも、悲みの谷にも、如來の御名を稱へて進み、大悲の御旨を讃へて喜ばれ、人生の秋の老いゆくをも思はず歌はせられた。見よ『正信偈』も歌である。『三文偈』も歌である。三帖の『和讃』は、大聖の金言と列祖の論釋と、自己の信念とを明したる、佛徳讃仰の一大詩篇である。何人かこの靈音に引着られぬ者があらう。如來の御名は實に、生命の國永劫の春に進む進軍曲であります。

人の盛も花の一時。昨日まで紅顔の美少年も、今は白髮の梅干面。「婆さんや、三々九度の盃をした時には、お互に若うて美しい、内裏難のやうだと云はれたが、今ぢや二人とも、棺桶へ片足突込んで、お迎をまつばかり、心細いなあ」と、涙に鼻汁をまぜて嘆けば、「お爺さん、そんなに泣事ばかり云ふものではありませぬ、まあ此でも一つ呑んでみなさい」と、懷中から紙包を出しつゝ、「これ、此の丸藥を呑むと若うなると云つて、今日或人から貰ひました、一つ妾がためしてみませう」と、云ふより早く一粒口に入れて嚥下

せば、不思議や、見る間に、皺だらけの顔は、瑞々と艶やかに、雪のやうな白髪は、打つて變つた鴉の濡羽色。年は三五六の世話盛になつた。お爺さん喫驚。「どれ己も一粒」と、早速服用すれば、此も四十位の男となつた。さうなると慾がつく「婆さん、もう一つ吞ませてくれ」と吞んでみると、今度は二十五六の血氣盛、婆さんも、負けては居らぬ、また一粒のめば、十八九の美しい娘となつた。まだ三粒残つて居るから、寧その事、一つ宛分けて吞めば、十五六の少年に、十二三の可愛らしい小娘となつて、飯事して遊ばうと云ふアドけない年頃である。男の方はまだ若くなるつもりであつたか、残の一粒をとつて方に吞まうとする。「あらお廢しなさいよ、貴郎がそれより若くなつては、妾こまるわ」と、引き奪らうとする、取らせまいとする、その刹那、薬は男の喉へ這入つてしまつた。お婆さんも、もう仕方がない、云何なる事かと、恐々見て居ると、お爺さんが急に「オギア〜」嬰兒になつて膝へにぢりあがる。これでは夫婦も何もあつたものでない。

薬も過ぐれば毒になる道理。私共は、若返る工夫よりも、年寄らぬ方法をとるがよい。いよく年のよらぬ若さの薬とは、如來の御名、南無阿彌陀佛である。既に無量壽、量りない壽命と云ふではありませぬか。「彼の淨土は是れ阿彌陀如來の、清淨本願の無生の生にして、三有虚妄の生の如きに非ず」無生の生であるから遂に死ぬることはない、曇鸞大師が仰せられてあります。何はさて措き、命あつての物種ぢや、何でも長生がしたいと云ふのが原因で、他力の信仰に入られた曇鸞大師から、この教を聞くのは決して偶然ではありません。親鸞聖人は、「大信心は長生不死の神方なり」と仰せられてある。幼にして父母に離れ、夜半の嵐に散る櫻に出家せられた聖人から、この言を聞く、決して無理ではありません。私共は只この信念によつて、

老おいを解脱げだつすることが出来できる。身みは衰おとろへても心こころは信しんに養やしなはれて、常つねに若わかく、常つねに勇いさましく、歡喜よろこびの歌うたを歌うたひつゝ、今いまや如來にょらいだいひ大悲はるの春はるの最中もなかぞ、稱しょう々く念ねん々く無む碍げの一道だうを進すすみ行ゆかう。